

表題 学校における「自由」をめぐる実態

藤井吉祥

ここにち、教育改革をめぐる議論のなかで「自由」という問題がきわめて重要な焦点となっている。かつて「学校における自由」といえば、上からの一元的な統制に対し、内実を伴った下からの（現場からの）教育を求める、という意味合いが込められていたのに対し、現在では統制する側からの「教育改革」における理念として大々的に語られている。しかしまた一方で、国旗・国歌をめぐる問題など一元的な統制への抵抗として語られる場面も少なくない、という混迷状況がある。

こうした「学校における自由」についての見方の違いには、「自由」の多義性にも由来する数多くの議論があるが、実際に生徒らが「自由」の下でどのような生活を送っているのか、ということについてはこれまであまり示されてこなかった。それは「自由」ということばの抽象性ゆえ避けられない面だともいえるが、しかし現在の混迷した状況のなかでは、あくまで具体的な実態から考えていく必要があるのではないだろうか。

このような問題関心から本報告では、参与観察の手法を用い、「学校における自由」にまつわる実態を明らかにすることを試みる。そのための調査対象としては、多少なりとも学校内に「自由」が位置づき、意識されているということが必要となる。そこで対象校を「私立自由の森学園」とした。学校名に「自由」を冠し80年代半ばに創立され、マスコミなども通じて内外ともに「自由な学校イメージ」の強い当校は、申し分のない対象だといえるであろう。

そこでの観察・聞き取りなどの分析から得られた論点をまとめれば、以下のようになる。

まず、これまでの学校体験における抑圧性からの解放が持つ意義と、その反面としての行為や他者とのかかわりにおける自明性のなさといったしんどさの様子からは、「自由」の**解放的な側面**が指摘できる。

また、管理的抑圧のないなかで実践されている、自主的なカリキュラムや諸活動の活況の様子と、その反面としての理想と自己とのギャップが生み出す苦しき様子からは、「自由」の**価値的な側面**が指摘できる。それは特に生徒らにとって、「自立」という価値と連動し、励ましとして機能すると同時にある種の抑圧ともなっている。

こうした両義性のなかで、生徒らは日々の学校生活を送っているのだが、そのしんどさ・苦しきへの対処として機能する、共同的な要素がいくつか確認できた。それらは「自由」と直接的に結びつけて語られることはあまりないが、内実としては「自分」という存在の確証を得る、と名付けうるような側面である。実践における難しさも孕みつつ、単なる対処にとどまらない自由の森学園の重要な部分でもある。

以上の分析から、最後の3つ目の側面にこそ、現在における「自由」の混迷状況を自由内面的に切り抜けていくための筋道があるのではないかと、ということを示唆してみたい。